

もののふの 矢並つくろふ 籠手のうへに 霰たばしる 那須の篠原

出典：金槐和歌集（677 番）

『**金槐和歌集**』（きんかいわかしゅう）

鎌倉時代前期の源実朝の家集（歌集）。略称で『金槐集』とも呼ばれる。成立は1213年頃。「金」は鎌倉の「鎌」の金偏をとったもの、「槐」は槐門（大臣）の意で、鎌倉右大臣（＝源実朝 くみなもとのさねとも）の敬称）の家集の意。

口語訳

那須の篠原で武士が矢の並びを直している。折からの悪天候の中、その籠手には霰が降りかかり、飛び散っている。

釈注

実朝は那須を訪れたことがなく、机上の作。かねてから伝聞していた建久四年の父頼朝の那須での狩りを想起し、また「わが袖に 霰たばしる巻隠し 消たずてあらむ 妹が見むため（柿本人麻呂）」を念頭に置きつつ詠んだものか。那須の篠原で狩りをする武人が、次の獲物を狙うまでのわずかな間、降る霰の中でひと息入れて、馬上で矢並を直しているという勇壮な情景である。

語釈

矢並つくろふ：背中に負う籠に差した矢の並び具合を整えること。

（校注者：樋口芳麻呂）